

平成 22 年 5 月 10 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007 ～2009
 課題番号：19520248
 研究課題名（和文） トランスナショナルなものをめざす文学的企て——フォークナーと中上を軸として
 研究課題名（英文） The Search for the Transnational: Faulkner and Nakagami
 研究代表者 田中 敬子 （TANAKA TAKAKO）
 名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授
 研究者番号：70197440

研究成果の概要（和文）：ウィリアム・フォークナーと中上健次のトランスナショナルな志向を解明するのに最適な理論の基礎として、ポストコロニアリズムとポストモダニズムの融合を提案した。それは両作家のテキストを分析し、これまでのフォークナー批評を総括した結果である。提案の検証として、中上と女性マイノリティ作家サンドラ・シスネロスの短編集を比較分析し、その有効性を確認した。それに基づき、フォークナーと中上の小説群から、グローバルな視点と、父権社会制度を超えるための語りの戦略をさらに詳細に示した。

研究成果の概要（英文）：With the overview of the recent Faulkner criticism, I suggest the combination of postcolonialism and postmodernism to analyze and evaluate comprehensively Faulkner's and Nakagami's search for the transnational. To confirm the effectiveness of this proposal, the collections of short stories by Nakagami and Sandra Cisneros are examined and compared. The prospective result has led to the further exploration of the novels by Faulkner and Nakagami, to determine their "glocal" points of view and their narrative techniques which allow them to transcend the patriarchal and the national boundary.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：英米文学・比較文学・トランスナショナル・フォークナー・中上健次

1. 研究開始当初の背景

21 世紀に入り、グローバリゼーション、多文化主義の奔流の中で、アメリカ文学も世界文学とい

う概念の中で整理しなおす必要が生じてきた。文学作品の固有性と地方性を尊重する一方で、トランスナショナルな方向性を見出そうとする作家た

ちを検証し、それを評価するための理論的基礎を構築することが重要となってきた。当報告者はウィリアム・フォークナーの研究を中心に行ってきたが、越境の文学という共同研究を経て、フォークナーと、彼に影響を受けた中上健次中心に、彼らの文学に共通するトランスナショナルな志向を包括できる視座を、それぞれ固有の文学性とあわせて検討することを計画した。

2. 研究の目的

本研究は、20世紀から現在まで活躍を続けている日米作家を選び、出身の異なる彼らのテキストにおいて、トランスナショナルなものがいかに企てられ、それが実現されたか否かを考察する。グローバルズムとナショナルリズム、ローカリズムがせめぎ合う21世紀社会で、文学におけるトランスナショナルなものへの希求を、いかなる批評理念に集約できるか。すでにある批評理論や概念を援用して、検討対象のテキストの共通点や相違点を明らかにするとともに、トランスパシフィックな視点も導入し、よりダイナミックな批評理念の構築をめざす。

3. 研究の方法

対象とする作家は、父権制社会に対する姿勢と、ローカル、ナショナル、グローバルと便宜上3種類に分けられる空間意識の鋭さを基本に選んだ。中心となるのは、ウィリアム・フォークナーと中上健次である。具体的には、この二人のテキストの語りの特徴、国家と家族についてのテーマを比較する。一方、これら男性作家に対し、メキシコ系アメリカ人としてのボーダーランド意識を持った女性作家サンドラ・シスネロス(1954-)の語り、父権制社会批判の特徴を分析する。第3の視点としてジェンダーを加えることで、より多角的な面からフォークナーと中上の共通する戦略、相違点の問題を探り、トランスナショナルな文学理論構築の手がかりを見出す。

4. 研究成果

平成19年度は、これまでのフォークナー研究に用いられた文学理論を整理、評価しつつ、新たな批評視座を求め、その展望を論文「フォークナーと批評理論—反復と脱構築」にまとめた。そこでは、一般に対立して語られるポストモダニズムとポストコロニアリズムを結合し、トランスナショナルな文学的企ての基盤となる理論として構築することを検討している。また、

日本ウィリアム・フォークナー協会編『フォークナー事典』では、編集委員を務め、日本のフォークナー研究の集大成としての事典の編集に編集委員として携わり、フォークナー研究のグローバル性と、中上健次や大江健三郎など、フォークナーに影響を受けた日本の作家のトランスパシフィックな視点、およびフォークナーに影響を与えたヨーロッパ作家たちの意義の明示に努めた。さらにマーク・トウェイン協会全国大会シンポジウムでは、「トウェインとフォークナーのヒューモアについて—二人のCon Man」という題でパネリストとして発表した。アメリカ南部というローカリズムと父権制社会に抵抗する作家の語りのヒューモアの戦略について、脱構築、ポストモダンな視点から検討した。

平成20年度は、ウィリアム・フォークナーと中上健次に対し、第3の視点として、メキシコ系アメリカ人女性(チカーナ)作家サンドラ・シスネロスのテキストにおいて、父権制社会に対する抵抗を考察した。フォークナーは南部白人男性、中上は部落民出身としてそれぞれ故郷に執着しつつ、南部社会や日本社会を超える方法を模索する。一方シスネロスは、アメリカ合衆国ではマイノリティ、メキシコ文化の中では男尊女卑の差別を経験しつつ、土地に対する執着と離散、ノマド体験という矛盾を基礎に父権制社会に対抗している。論文”Short Story Sequences and the Narrative Strategy of Minority Literature: Kenji Nakagami and Sandra Cisneros”においては、中上の短編集『熊野集』とシスネロスの短編集 *Woman Hollering Creek and Other Stories* を比較し、伝統文化が育む父権制ナラティブに対し、中上、シスネロスがそのような伝説、神話をどのように脱構築するかを解明した。また、ポストコロニアリズムにくわえ、物語の脱構築、言語の独立性というポストモダニズム的な批評のパラダイムも、中上、シスネロスの短編集のトランスナショナルなものを目指す戦略分析に有効であることを示した。この論文の主旨はより短縮した形で、科研費で出張したハワイでの第7回 International Conference on Arts and Humanities にて研究発表し、ガルシア・マ

ルケスの研究者や、ジェンダー批評研究者たちと有意義な意見交換を行うことができた。またフォークナーについては、トウェイン協会のシンポジウムでの発表をもとに論文にまとめた。ここではフォークナーの語りの南部的ヒューモアが、トウェインとも比較しうる詐欺師的、脱構築的な語りとして戦略化され、ローカリズムを超えていることを明らかにした。

平成21年度は、3年目の総合として、フォークナーと中上の父権制社会に対抗する語りの分析を、彼らのトランスナショナルな志向と絡めて、*Global Faulkner : Faulkner and Yoknapatawpha 2006* (ミシシッピ大学出版) 中の1章を構成する“The Global/Local Nexus of Patriarchy: Japanese Writers Encounter Faulkner.”にまとめた。毎年フォークナー会議の成果として30年以上出版されているシリーズで日本人研究者としては二人目の論文である。ここでは中上がポストモダニズム時代の作家として、父権制社会や国民国家的な法制度から逃れるために、合理的、総合的な結論に至る語りを避けること、それがフォークナーの場合よりもさらに意図的に行われることを明らかにした。続いて、北京外国語大学で行われたIASA第4回国際学会では、フォークナーと中上について、漂流する主人公と、共同体と外部の境界線上に位置する女性の遭遇、というテーマで発表した。二人の作家のトランスナショナルな傾向はここでも共通して表れている。共同体、ひいては国家制度も越えようとする主人公たちと共同体の葛藤が、ジェンダーの伝統的役割や共同体の神話、伝説にもかかわることに着目して研究発表を行った。

さらに、以上の男性作家のトランスナショナルなものをめざす語りの分析が、第3世界のチカーナ作家の語りにも応用されることを、「チカーノ/チカーナ文学の越境性——ローカルと普遍化のはざままで」(土屋勝彦編『越境の文学』)において示した。ここではサンドラ・シスネロスやグロリア・アンサルドゥアらチカーナ作家のテキストでも、ポストコロニアリズムからの国民国家批判とポ

ストモダニズム的な言語へのこだわりをからめてトランスナショナルな語りをめざしていることを指摘し、総合的に検証した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3件)

1. 田中敬子、「トウェインとフォークナーのヒューモアについて——二人の Con Man」、『マーク・トウェイン——研究と批評』、査読無、7号、2008、24-31
2. 田中敬子、“Short Story Sequences and the Narrative Strategy of Minority Literature: Kenji Nakagami and Sandra Cisneros”、『人間文化研究』、査読無、10号、2008、289-300
3. 田中敬子、「フォークナーと批評理論——反復と脱構築」、『英語青年』、査読無、4月号、2007、8-10

[学会発表] (計 3件)

1. Takako Tanaka “The Dangerous Women” and the Nomadic Hero: Faulkner’s *Light in August* Reconsidered through Nakagami Kenji”, The 4th IASA Conference, 2009年9月20日、北京外国語大学
2. Takako Tanaka、“Short Story Sequences and Minority Literature: In case of Kenji Nakagami and Sandra Cisneros”, The 7th Hwawaii International Conference on Arts and Humanities, 2009年1月11日、ホノルル
3. 田中敬子、「トウェインとフォークナーのヒューモアについて——二人の Con Man」、『マーク・トウェイン協会全国大会』、2007年10月12日、広島経済大学

[図書] (計 2件)

1. 田中敬子、他、「チカーノ/チカーナ文学の越境性——ローカルと普遍化のはざままで」、土屋勝彦編『越境の文学』、水声社、2009、91-118
2. Takako Tanaka、他、“The Global/Local Nexus of Patriarchy: Japanese Writers Encounter Faulkner.” Annette Trefzer, ed. *Global Faulkner: Faulkner and Yoknapatawpha 2006*, UP of Mississippi, 2009、116-34

[産業財産権]

○出願状況 (計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 敬子 (TANAKA TAKAKO)
名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授

研究者番号：70197440

(2) 研究分担者 ()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：